
ルイズ：ハルゲギニアに還る

ポギャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルイズ：ハルゲギニアに還る

【Nコード】

N4897Y

【作者名】

ポギャン

【あらすじ】

ルイズが5歳の時、或魔法の事故で、異世界地球に渡り、色々な事が合つて、漸く15歳の春先に、ハルゲギニアに、帰還した時から、物語が動き出して行く……

001話ルイズの地球での10年その1(前書き)

皆様のご指摘を、
受けまして

001話を編集し直して

投稿しました。

来れからも、不備等が、会ったら遠慮無く、
ご指摘を願います。

001話ルイズの地球での10年その1

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

5歳の、ある春の日で在った。

その日ルイズは、或、覚えてたての呪文を唱え、召喚の鏡を呼び出すのに、成功して、ハシヤギ過ぎて躓き、鏡に触れて？そのまま吸い込まれて、消えて云った。

その光景を、目撃した、使用人がヴァリエール公爵夫妻に、至急報告して、連絡を受けた、公爵夫妻は、家臣並びに使用人を総動員して、城館周辺、及び、ヴァリエール領地内を隅々まで搜索したが、見付からず、更に探索の手をトリステインを始めハルゲギニア中に広げたが見付からず？

そのまま、10年の歳月が過ぎ去った。

その頃、鏡の中に消えたルイズは、？

『此処は何処なのー母様、父様、ちい姉様、怖いよーお腹すいたよーうわあーん、うわあーん、あーん、あん、』

辺り憚らず大声で泣きわめく、ルイズ、すると。

「何を損なに泣いているのかい、可愛い顔が、台なしだよ、小さなお嬢さん」

急に声を掛けられ、びくつくルイズ立ったが、良く見ると、優しい笑顔でこちらを見る、おじさんがいた。

来れが後にルイズを引き取り、養女にした、敷島礼次郎「博士」との、初めての出会いだった。

(ルイズの心の声)

(博士と出会ってから、5年が過ぎ、私は今、10歳に成り、此、5年間の出来事を振り返っていた。)

(色んな事が、遭った話ね、あれから、博士の家、兼、研究所に入って、色んな事を聴き、私も知っている事、総て話した結果、此処は、ハルゲギニアで無く、地球と言う、異世界の日本国内の某都市と言う事だった)

(私は、悟った、二度と母様や父様、姉様達と、逢えないと、そして涙が止まらない程、大声で泣く私を、優しく抱きしめながら、博士は、

「君を必ず絶対にハルゲギニアに還して見せると」

誓ってくれた！)

(あれから、博士は、ツテを使い裏から、法務局に手を廻して私の戸籍を修得して、博士の養女に成った)

(それから博士は、言葉は何故か、通じ合えるけど、日本語が読めない私に、平仮名、片仮名、漢字を教えてくれて、更に算数や地球世界の知識や、各種常識等を、統べて教えてくれるの、良い事何だけど、私は、少々着いて行けなくて、パニックに成った)

(私が此処に来て一ヶ月が過ぎた頃、私と博士は、お互いに隠していた秘密を伝え有った、

『私、才能は無いけど、魔法が使えるの』

「僕もね、台した者じゃ無いけど、超能力者なんだ」

私と博士はそう言い合って笑ったけど、後に博士の力を見せて貰ったけど、謙遜だったとう事が判った、く立ってくサイコキネシスは、

風のスクウェアー立っし、パイロキネシス何か、火のスクウェアーを超える威力だし、テレポーションは、コモンマジックや、四系統魔法でも出来ないし、伝説の虚無は出来たらしいけど、でも一番凄いのは、予知能力よね、あれで株式で儲けたり、各種ギャンブルで稼ぐのよね〜)

(日本に来て1年ぐらいは、驚きの連続だったは、馬より速くて乗り心地抜群の自動車や、火竜と同じぐらいのスピードで、一度に千人の人を乗せて走る電車に、風竜より遙に速くて高く飛ぶ飛行機等、あと空は飛ばないけど、ハルゲギニアのフネより遙に大きな海を走る船等、驚く事ばかりだった)

(でも博士の此、話を聞いたときは、哀しかった、博士は生まれ時から強大な力を持ち、それゆえ、親兄弟に恐れられ淋しい子供時代を、過ごし、中学を卒業し、東京に出て来て、働きながら、高校、大学、大学院を卒業して、各種の資格や博士号を修得した博士は、
凄いな)

(私の戸籍上の誕生日は、3月3日なので、日本に来て一年がたった頃、小学校に、入学する事に成る)

(最初は平民の学校何てと思いはしたけど、そう、地球世界は王様は居るけど、貴族は殆ど居ないのよね、)

(私が通う所は、研究所の近くの小学、中学、高校、

大学まで有る一貫教育の女子校のお嬢さま学校だった)

(此処は創立100年以上を誇る、伝統の名門お嬢さま学校だけに、

学業とスポーツの所謂、文武両道をモットーに、21世紀の日本では珍しい、淑女しての各種厳しい常識や嗜み及び道德観を、叩き込む、恐ろしい学校でした、逸れに比べたら、後にハルゲギニアに還つて入学したトリスティン魔法学院等は、生徒に甘く、規律が無いに等しい、馬鹿学校でしか、有りません)

(此処の地球世界の月は、ハルゲギニアの双月と違い一つで一回り小さくて色も黄色い月ですが、此処の人類はその月にロケットを飛ばして行ったのですから、
物
凄い事です)

(私が魔法の訓練をしたいのと、
言うと、

博士は、 某県、奥秩父の、 更に奥に或、博士所有の別荘を、使いなさいと、週末の休みに、二人で良く行くようになった)

(そこは、近くに小さな溪流が有り、 閑静で緑豊かな、 と
ても良い場所で、
私のお
気に入りでも有る)

(博士が私の魔法を使うのを見たり、私から聞き出した、ハルゲギニアの魔法の知識を知って出した結論は、

失われたと謂われる、伝説の虚無だと。

私何かが無等で或はありますが有りません、

相違つて博士を見ると、哀しい瞳をして
「ルイズ、人は誰でも無限の可能性を持つて要るんだよ！ここで諦めたら、そこから先は何も進めないだよ、」

(そう言いながら私を、そっと優しく包み込む様に抱きしめてくれ

る、博士)

(後に成って思うと、とても恥ずかしかった)

(あれから、博士のアドバイスも有り、爆発魔法の制御も出来る様になり、等々フライヤ、レビティション等の各種コモンマジックが出来る様になった、嬉しい)

(魔法が使える様になって、自信が付き、学校でも友達が出来たり、部活で柔道部に入り、とても充実した日々を送り、季節は巡り)

(10歳に成った私は、博士の奨めも有り 紹介で或、道場に剣術を習いに通い出した、道場で一つ上で11歳に為る、生涯に渡る、運命のパートナーに成る?)

平賀才人に出会った。

春の淡い陽射しの、午後の出来事立った)
続く。

001話ルイズの地球での10年その1（後書き）

只今、002話を執筆中です。

002話ルイズの地球での10年その2(前書き)

最初の001話を

皆様方のご指摘を請けて、

編集し直し、再投稿しましたが

まだ、システムに慣れて無くて、

皆様方に頂いた

感想文を消して仕舞い

誠に申し訳ございません

来れからは、気をつけて行きますので

宜しくお願いします。

002話ルイズの地球での10年その2

東京都内某剣道場内

「あああ…なんだ此処は？ボロボロな処だあ…真ともに、剣道を教えてくれんのか」

『あんだね〜此処は - 剣術場よ！剣術場！』

「そんなの、どっちも一緒だろ」

『一緒の分け無いでしょ〜…あんだ、何にも知らないで来たの〜脳天気ね〜呆れるは…』

「べべ、別に、良いだろ〜逸れより、俺は、あんだじゃあねえ、平賀才人と言う、立派な名前があんだよ〜」

『逸れは、悪かったわ？私は、ルイズ・フラン…いえ、敷島ルイズよ！宜しくね』

相違って握手を求める、ルイズ

「なあルイズって呼んでいいか

」

『良いわよ！馬鹿正直そうだし、特別に呼ば・せ・て・あ・げ・る
！』

「なんだあゝ偉そうな、上から目線は」

『来れども！あんたの事、一応褒めてるのよ！』

「だから、あんたじゃあねえよ！才人って云ってんだろっが！此、
ピンク頭が！」

『何ですって！……』

（ルイズの心の声）

（そう、最悪のの出会い立ったのよ あの時、コテンパンに熨て拳
げたもんだから！本当は次から来る気は、無かったのよね）サイト
は、）

（あの日から土日の週末は、

剣術の早瀬平八郎師匠？

処に通うのが嬉しくって、ウキウキしては、サイトに逢えるから）

（そりゃあ、サイトは、

馬鹿でスケベだし、あと、オッチョコチョイで、すぐ気が抜ける奴
だけどゝ頑固な程真っ直ぐな熱血漢の正直者だし、そうゆう処があ
いつの長所なのかな）

（剣術練習が終るとお腹が空いてるから、サイトが好きなマツクの照り焼きバーガを二人して食べに行ったり、その次は私の好物の吉牛の牛丼大盛を食べたり、珠にはカラオケやボーリング、映画等を楽しんだり？してたわね〜）

（そう有れば小学校の修学旅行先が沖縄で、初めてジェット旅客機に乗ったときは、感動しわね〜そんな日本での楽しい日々が、終りに近付いて居たなんて気付きしなかったのよね〜あの頃の私は！）

（博士にとっても深刻な事を、打ち明けられたのは、中学の修学旅行先のオーストラリアから、帰って来た翌朝の事でした）

早朝、ルイズが起きて、リビングに行く。

『おはよう、博士』

「おはようルイズ、とても大事な話が或から、ソファアに座って、黙って聞いてくれないか。」

ルイズは静かに博士の話を聞いていた、

「ルイズ、結論から先に言つと、此まま君が地球世界に居続けると、此、地球とルイズのハルゲギニア世界が異次元空間の歪みに依つて、あと、

5年以内に内部崩壊を起こして、消滅擦ることがわかつた！」

『そ、それは、どう言つた事ですかー博士！』

博士がルイズに、語つて聞かせた事は、

ルイズ自身の膨大な魔力がハルゲギニア世界を構成する力の源の一部分で有り、ルイズが長期間不在の為、バランスが崩れラインが繋がつて要るルイズを通して、此、地球世界の力の源に過剰なエネルギーが送り込まれて

地球世界全体が、活性化して内部崩壊を起こすと言う事だつた、

一方のハルゲギニアもエネルギーの流失でバランスを崩して同じく内部崩壊を起こしてまう事だつた。

「だからルイズを一年以内にハルゲギニアに送り返そうと、思つて
いる」

「又、其が君に誓った、約束事立ったがルイズ自身は、今、どう思っているんだい」

「……わ、私は、今、そんな、重大な事、きゅ、急に謂われても？」

「重大事を急に謂われてルイズにも、戸惑うが事が色々有るのは、判ってはいるが決心して欲しい 其に魔力制御が真だ、不安定だから、努力して完全に安定差して欲しい、

時間が掛かると思うから、その間に結論を出せば良いさ、慌てて決める事は無いよルイズ」

そうルイズに優しく語る礼次郎だった。

(ルイズの心の声)

(博士に重大事を聞かされた私は、暫く茫然としていたけど、はっとして気付き、来れからの事を色々考えていた)

(今まで夢に見る殆ど逢いたかった、愛しい家族の元へ還れると、判ったのに、

本当は嬉しい筈なのに、胸の奥がズキ、ズキ、して痛かったのはサイトの明るい笑顔が心に想い浮かんで？居たからなの……)

博士がルイズに重大事を告げた日から一月が過ぎた日の

（或街の喫茶店内）

「どうしたんだ〜ルイズ、映画館に入る前からポーとしてたし、今も心此処に非ずだし！」

『別に……………』

「別につて、今日だけじゃねえ、最近のお前！どっかおかしいんじゃないのかー！」

『べ、別に、おかしく無いわよ！ふ、普通よ、極普通』

「いや！でつたいに、違う！良く、溜め息抜かし尽くし、飯を食いに行つても、残すし、
今までのルイズじゃ！考えられねえーんだよ」

『何よ、それ、私だつて〜溜め息ぐらい尽くし、調子が悪ければ、
御飯立つて残すわよ、』

「なあ……ルイズ」

『何よ』

「何か悩み事が或なら、相談してくれ無いか、俺じゃあ、頼り無いかも痴れないが、俺ルイズの事が凄く、心配何だよふつと何処かに消えて仕舞いそうぞ」

そう才人に謂われてギクつとしたルイズ立った。

『そそそ存な事有る分け無いわよ！』

「そうか、其なら良いんだ、でも、もしも、悩み事が出来たら、俺に相談してくれたら、俺、凄く嬉しいんだ、」

『……判ったわ、もしも悩み事が出来たら、一番先にサイトに相談擦るわ、来れでいい』

「有り難う、絶対に相談してくれ！」

そう言って安心擦る才人で在った。

研究所への帰り道のルイズ

…)
(サイトが凄く私の事を心配してくれてた何て〜とっても嬉しい…)

(だからこそ、絶対に！サイトには、こんな重たい秘密を知られる訳には、知れば、心が真っ直ぐな人だから、悩んで、悩んで、苦しむは)

(…其に後先考えない処が或から、二人いしょっに行こう何て言い出しかね無い人だから…)

才人には、真実を告げずにハルゲギニアに還ろうと、思っていたルイズで有った。

それから、日にちは立ち、ルイズと博士はハルゲギニアへの帰還準備に向けて、各種装置の製作や魔力制御の向上に勤しむ日々を過ごしていた。

（明日は地球世界での、私の誕生日を迎えるのね、ふふ…博士に重大事を、告げられて一年近く達の ね、

あれから色々な事が有ったは、

サイトの受験勉強の面倒を見たり、

海へ泳ぎに行った時何て、初めて見る私の水着姿に顔を少し朱くして照れたときは、可愛いかったわ〜）

才人との思い出を作る為に方々に出掛けた日々を思い出して、ルイズだった。

（……サイトとの楽しい日々も後二日で終るのね……）

ハルゲギニアへの帰還の儀式は、三日後の早朝に奥秩父の博士の別荘で、行ふ事に成っていた。

（博士には、此、10年、何処の誰ともしれない見ず知らずの私を育てくれて、学校に通わせてくれたり、各種知識や常識、道德観等の人としての生き方を教えてくれたし、其だけで無く私をハルゲギニアに還してもくれる、本当に博士には、感謝仕切れ無い程の恩を請けたのに、其を返す事が出来ない何てトリストインの貴族としては、

忸怩たる思いだわ）

（その事を博士に言つと

「僕が好きでした事だから、ルイズは気に擦る事は無く、堂々と胸を張ってハルゲギニアに還ると良いよ、」

そう言ってくれた博士に私は抱き着いて涙を流しながら静に泣いていた、何時までも……）

続く。

002話ルイズの地球での10年その2(後書き)

次で地球編を終わらせたいと、

思いますが

どう成るのは

作者もまだ判りませんか？

003 話ルイズの地球での10年その3 (前書き)

漸く書き上げました。

003話ルイズの地球での10年その3

ルイズの地球世界での誕生日を明日に控えた日のある街のファミレスの店内

「なあ、ルイズもう喰わねえのか？」

『ちヨット食欲が無くて』

「残すのならそのパン喰っても良いか？」

『もう、サイトたっら行儀悪いわよ！でも、ま、食べても良いわよ』

「へへへ……悪いな、ルイズ、サンキュ」

『それにしても
良く食べるわね』

感心するわ!』

「そりゃあ師匠に
あんなだけやられちゃあな、腹がすくつてもんだ!」

『私達だって
決して弱くわないけど』

「そりゃあな、俺達のレベルは高校のトップレベルとかわらねえか
らな、」

『そつよね先生が強すぎるのよ!』

「有れは化け物だ、一瞬にして
詰め手来る足捌き、剣速の凄さ何て人間技じゃ無いからな、」

『そう知ってるサイト、先生って若い頃武者修行と称して世界中を放浪して暴れまくり、各地で伝説を遺したらしいのよ!』

「とんでもねえ〜オッサンだな〜」

『全くそうよね〜歩く人間火薬庫だわ有れば』

そう言っつて笑いこけるルイズと才人。

(ルイズ心の声)

(その早瀬平八郎先生は博士の親友で、

私の事を博士以外で知っている唯一の人で有り、

剣術の師匠でも有る
先生に5年間の稽古の御礼を申し上げてハルゲギニアに還る事を告
げた)

(そう言つと先生は「還るのか、向こうに行つても剣術の修行は怠
るなよ!

あの馬鹿には告げずに行くのか」

そう言つた先生の顔は少し淋しそうだった…)

「おおい、ルイズ聞いているのか」

『……え、何か言つた、サイト』

「何だよ、俺の話しを聞いてなかったのか!」

『ごめんね、考え事をしていたから』

「何だよ、せつかく明日はルイズの誕生日と俺達の高校入学を祝つ
て、

何処かに遊びに行きたいのか聞いてたのに!」

『悪かったわそのお詫びに、どうせ遊びに行くなら、おおお奥秩父に在る』

博士ののの、別荘に来ない、土日のととと泊まりがけで、ももも勿論

二人切りよ!」

「ルル：ルイズさんそれって…まさか、
あ、あれをコウシテ、ナ、ナニヲ、くんずホグレッツ、OKの、
有れの事ですか？」

『もう、声が大きいわよ、周囲に聞こえてしまっわよ!』

「ほ、本気なんだな!今更 ダメでしたなんて事は、無しだからなあー」

『……ううう煩いのよ！だから、大声で喋るな！と言ってんでしょ
うが！』

『このーおお馬鹿、エロ犬が！』

そう叫びながら

全身を不死鳥さながらの紅蓮の炎のオーラを纏いし
ルイズが、

今だテンションを
上げて喜んでいる
才人に襲い掛かり、

まずはドロップキックを鮮やかに決め、
才人を床にはいつくばらせ、

そこを素早く四のじ固めに持ち込み更には、コブラツイストやキン
肉バスター、キン肉ドライバー等、数々の技を繰り出し才人を阿鼻
叫喚の地獄へと叩き込む
ルイズさんで有った。

（女を怒らせると怖い）

〳〵翌日のある街の駅前の広場〳〵

「おおいコツチ、コツチ、」

『何よ、サイト朝早くから情けない声出して
もっとシャツキとしなさいよ！シャツキと』

「何言つてやがる、これは昨日お前が俺を地獄のフルボッコにした
後遺症じゃあないか」

『な、何よ、あれはサイトが悪いんだから！』

（店をメチャクチャにした私達は
あれから店の人達に物凄く叱られ

弁償する嵌になり

博士に事情を話してお金を払って貰い

その事で御免なさいと謝ると。

「別に気にする事はないんだよルイズ、次から気をつけてくれれば

良い事だから」と、

笑ってそう言ってくれる博士だけど

私は申し訳なさでいっぱいなのに、

コイツときたら朝から能気な顔して

少しも反省してないわね！)

(昨日はやり過ぎたと思っていたのに

こんな事ならもっと徹底的にすればよかったわ！)

そう思うルイズは不機嫌になり、

奥秩父に向かう電車の車内で

ギヤアギヤア、

周囲の迷惑も考えず煩い二人だった。

まだ不機嫌だったルイズは、

才人を連れて奥秩父の名勝地を散策して

昼には秩父の名物料理を食べた頃には

機嫌も直していたルイズさんでした。？

食後のデザートを食べ、店を出た二人は、目的地の敷島博士の別荘を目指し歩いて行く。

春先のまだ少し寒い中、

木漏れ日の陽射しを浴びて歩く

小道近くに流れる小川のせせらぎを聴きながらしていると、

小さな坂道を登る先に、

周りを緑豊かな景色に囲まれた

普通より少し大きくて瀟洒な、

それが敷島博士の別荘で在った。

「へえ、此処が敷島博士の別荘なのか」

『そうよ、ステキな処でしょう』

そういつて 前よりも少しだけ成長した、まだまだペタンコの胸を張って誇らしそうにしていた
ルイスさん。

(ムムム……何か非常に失礼な事を言われた気がするわね！)

ルイズが才人を伴って暖炉の在
広いリビングのふかふかのソファ―に二人仲良く座ると才人が。

「スゲーなあ、敷島博士の別荘は、歩く度に沈むジュウタンなんて
俺、初めてだよ〜！
此ソファ―だつてふかふかだしな〜」

『そうよ！別荘の建物自体は博士が設計図を引き、
それを国内の一流メーカーが建てたのよ』

実は博士は建築士
の免許を所持していて、
それで設計図を引けたのであつた。

『内装はヨーロッパの有名インテリアデザイナーに頼んだし、
暖炉を筆頭に家具や寝具、キッチン、照明等も北欧の
一流メーカーから
輸入したんだから、良いでしょう。』

そう言つてまたもやペタンコの胸を張つて、

別荘の事なのか博士の事なのか
分かりにくいが
物凄く自慢していたルイズさんであった。

(……また、物凄く失礼な事を言われた気がするわ！)

それからルイズは
才人を連れて

別荘内を
案内して廻ると

リビングで二人でお茶を飲み
午後のひと時を楽しんでいた。

(……もう何をしているのよ！私だったら此処までできながらーあと一
歩の決断がつかないなんて……)

此処までできながら
まだ、決心できないルイズ……

(もう！サイトたっら、
何時もはしつこいくらいに

キスしようとしたり身体を抱きしめてこよつとして来るくせにー
さつきから顔を赤らめてモジモジして！意気地が無いのよー男のく
せにー！）

才人のへたれぶりに、

ルイズの心の中は強風が吹き荒れようとしていたが、

（……此ままじゃあ何時までたっても埒があかないわね、
シヨウガナイか）

（サイトはへたれだし
私の方から
アプローチするしかないわね……）

『ねえーサ、サイトーおおおお風呂ににこい、
ははは入らない二人切りで！』

頬を朱く染め恥ずかしそうにしながら
才人にそう言った
ルイズさん！

その言葉を聞いた
才人は

「ほほほ本気ですか ルルルイズさん？」

顔を真っ赤にして

ルイズに聞き返す

根性無しのヘタレの才人だった。

『こここんな恥ずかしい事

おおお女の子の方から言わせないでよ、

いいい一緒に入るのが嫌なら

別、別に良いのよ

わわわ私としてわね？』

「いえいえ有り難く二人一緒に入らせて頂きます
ルイズ様」

コウシテ二人は風呂場に向かうのであった……やれやれ。

続
く
…
…
…

003 話ルイズの地球での10年その3 (後書き)

恋愛部分を書き上げるのは、
難しい。

004話ルイズの地球での10年その4（前書き）

こんな駄文でも、

楽しみにしていた方達に、004話を楽しんでください。

（今回で地球編は終了します。次回からハルゲギニア編です。）

004話ルイズの地球での10年その4

くく心臓をドキドキさせながら、風呂場への廊下を静かに歩いて行くルイズと才人くく

「ル、ルイズさん、ささ先にはいっておく、おくんまじくちね...」

『もう、サイトたつら変な話しかたして！緊張してるのかしらく？』

「いや別に、キキキンチヨウなんかしてねくよ？」

そう強がりを言いながらも。肩は震え
脚もガクガクブルブルなヘタレで、
情けなくい才人で
あつた。

結局はルイズが渋る才人を強引に引きずって、脱衣所に入って行った。

「あのルイズさんマジマジと見られると。恥ずかしいんですか」

『…別に良いでしょうコレカラ二人一緒に入るんだから、ね』

「そうおっしゃいますがルイズさん。まだ服を脱いでいないんですが。」

『ああああなたが脱いだら、私もすぐに脱ぐわよ！だから最後に残った』

そのパンツ！さっさと脱ぎなさいよー』

そういつて、眼を

血走らせて才人の

履いているパンツを脱がせる。ルイズ

これだから女は怖い怖い。

才人を後ろ向きに

させて、服を脱いで生まれたままの姿に成るルイズ

「ルルルイズ、もう前を向いても良いか？」

『…ええ前を向いても良いわよ』

そう言われて才人が見たのは。流れるようにウェーブがかったピン

クブロンドのしなやかな髪に、

鳶色の潤んだ瞳

朱く染めた頬に整った鼻筋に小さな薄紅色の可愛い唇と
まるでフランス人形のような顔。

更に両手で隠す形の良い小さな胸に可愛いお臍。下に行くとき髪と
同じピンク色の若草にアサリのスジ、スラットした
細くて長い脚と身体全体が華奢な物凄い美少女がそこにいた。

「き、綺麗だあ……ルイズ」

『あああまり見ないでよ〜はは恥ずかしいんだから!』

『……そそそれよりも。サササイトの方こそ隠さなくて良いの、ブ
ブブラブラ
した物が見えているのだけど……』

「おおお前〜み見てんじゃあねえよ!」

『別に良いじゃあ

無い。か、可愛いらしいの持ってるの
だから』

「ハアフウ」

ルイズに股間が可愛い良いと言われ。落ち込む才人。

気を取り直してルイズと一緒に風呂場に入る才人。

「うわあ、俺ん家のフロと違って広くて天井が高く明るくて。それに凄くきれいだ」

「ウフフ、説明口調有難う。2年前に改装して浴槽は大理石で大人6人が余裕で入れる程広いし。」

それにオール電化だから24時間何時でもすぐに入れるのよ」

」

それからルイズと才人は。二人で身体を洗いあって「ウフ、キャアキャアな事を繰り返したのであった…チクシヨウ…羨ましい。」

たっぷり楽しんだ二人は。風呂場を出てリビングのソファで寛ぐのだが、

突然 才人が？。

「あのなあ、ルイズ」

『なあに、サイト改まって何かあるの』

ごくつと唾を飲み込み、覚悟を決めた才人は。

「今日はルイズの誕生日だから、俺お年玉や冬休みのバイトして貯めた金でルイズのバースデープレゼント買ったんだ」

そう言つて才人は

綺麗な包みにピンクのリボンを施した品物をルイズに手渡した。

『これを私に買ってくれたの。』

「そつだルイズ、早く開けて見てくれ」

早速。品物の中を開けて見ると金の鎖にプラチナの台座に嵌め込まれた。粒は小さいがキラキラ光り輝く綺麗なピンクダイヤがあった。『……凄く嬉しい……有り難うサイト。』

そういつて。才人の胸に飛び込み 少し嬉し泣きの瞳でサイトを見つめるルイズだった。

「こんなに喜んでくれる。ルイズを見れて俺もスゲー嬉しいんだ！」

そういつて抱きしめあつて。キスをする二人だった。

(サイトが私にこんなにも。ステキなピンクダイヤのペンダントを買ってくれた。)

(踊り出しそうに成るくらい物凄く嬉しい。サイトから貰った此ペンダント肌身離さず一生手放さないわ！)

ルイズに取っては

想定外の嬉しいサプライズでしたが

あとは…

「オオオオレ、ルルルイズの此が好きなんだ。いやマジで真剣にお前の事が大好きなんだー！
今からルイズの大切なモノを貰うから
覚悟してくれ！」

『……いいいわ、私も覚悟していたし、…私の初めてをサイトにあ
げても良いわよ！……』

「ルイズ」

そう言つて才人は
ルイズを抱き上げて。所謂・お姫様ダッコをして。寝室に向かう才
人であつた。

寝室に入ると一先ずはルイズをベッドに座らせ。着ていた
服と下着を脱がせ
生まれたままの姿にすると。才人も同じ様に脱いで裸になりルイズ
を抱きしめながら、ベッドの上に押し倒す才人であつた。

ディープなキス等。色んな下準備をしてさあコレカラ大事な事に及
ぼうと例の

アレを使おとしていた才人にルイズは。……？

『チヨット待つてサイト……』

「怖じけづいたのかルイズ！此処までして、今更止まらないぞー俺は！」

『違うの〜今日は〜超〜安全日だから〜大丈夫なの〜私〜肌が弱いから〜アレを使わないで欲しいの〜お・ね・が・い・ね。』

普段と全く違う程の可憐な仕種と声に
才人は…？

「本当に良いのか、生でしても」

『うん、良いの〜』

そう言って頷く
ルイズ。

（ごめんね。騙して本当は超危険日なの、明後日に。ハルゲギニアに還ったら
サイトには二度と逢えないと思う。それだからこそ私はサイトとの確かな、愛の絆がどうしても欲しかった。

）

(そうしなければ

コレカラー生、愛しいサイトに逢えなくなると思うと、
気が狂う程辛くて生きて行けそうにないから……)

ルイズの思惑も知らない。憐れなサイトはルイズと朝方までとても
深く激しく愛おしむ様に愛しあっていた。……

仲良く抱きしめあう様に眠っていた二人が起きたのは。もう夕方頃
であった。

熱いシャワーを浴びた二人は

ルイズが簡単な？夕食を用意して二人楽しく食べた後……

「俺は今から家に帰るけど、ルイズはどうする？」

『私は。あした此処で用事が有るから
今日も泊まるわ。後で博士も来るから
心配しなくても大丈夫だからね。』

そう言ってルイズは才人を安心させて
送り出す様にする。

別荘の門の処まで
才人を見送りにきたルイズは…

『気をつけて帰ってね。それから途中寄り道して遅くなって、御両親に心配かけてわ駄目だからね！サイト』

「バー口。ルイズに言われなくても
チャント判ってるよ俺も子供じゃあ無いんだからな」

『うふふ……確かに、アソコは子供じゃあ無かったわね』

「女の子がそんな言葉をいつちやあ駄目なんだよー」

『そんなに怒らないで〜冗談よ。冗談』

「冗談なら良いんだけどな？」

「二三日の内に連絡するからな〜入学式までは。まだまだ遊べるかな。じゃあなルイズ」

（その頃には私は

ハルゲギニアに還っていて此世界には

居ないのよ、サイト……）

『サヨナラ……』

サイト』

そう言っつてサイトの姿が見えなくなる迄見送つた後。

別荘に入りリビングのソファで静かに涙を流し、声を押し殺して泣いていた

ルイズだった……

ルイズが泣き止み。暫くすると

いつの間にか敷島博士がリビングに着ていた。

『博士……いつの間に……』

涙を拭きながら博士に問い掛けた。ルイズだった。

『才人君との別れは済んだのかい。ルイズ……』 『……そうです……
……終わりました……』

未練が無いと言ったら、嘘に成るけども…覚悟を決めた積もりでしたけど…けど…こんなに苦しい何て…私…』

今にも泣き出しそうな顔をしながら、博士に苦しい気持ちを伝えたルイズに。

博士は静に近寄り

そっと手を握り、

真っ直ぐに優しい瞳をして穏やかな声でルイズに……

「ルイズ、泣きたいときは我慢する事は無く泣きたければ。泣けば良いんだよ

そして明日は良い笑顔でハルゲギニアに還って欲しいと思っているんだ ルイズには！」

『…博士…』

そう言つて博士の胸を借りて。泣きつづけるルイズでした。

く早朝の奥秩父く

三月上旬の春先とはいえまだかなり寒かったが、今日は雲ひとつ無い快晴の青空が広がっていた此処

敷島博士の別荘ではある特別な儀式を行う為の準備をしていた最中で在った。

『博士！此、支柱は此 場所に設置して良いですか。』

「いや、ルイズその支柱はあと北へ2センチ程動かしてくれないか。

」

『判りました。あと2センチ北ですね。博士』

こうしてルイズと

敷島博士は。別荘の裏庭一帯を使って

ハルゲギニアに帰還する為の簡易型の魔法の結界を築く為に必要な。
各種装置

《所謂増幅装置》

を。ルイズと博士は設置していったのである。

「これで統べて準備は整いましたね！後は。ルイズ。ハルゲギニア
に持って行く荷物は全部リヤカーに積み込みましたか。」

『はい！博士。荷物は全部頑丈に梱包してリヤカーに積み込みまし
たから。』

そう言って博士に

返事していた。

ルイズの荷物のリストはと言うと……

各種。技術書 医学書 薬学書 各学術書等の書籍や。

ルイズが地球に來た時の服と靴そして大事な杖。小型の太陽光パネル6枚に小型充電器二台 各種医薬品セットのケース一つ 各種調味料多数 魚。肉。

フルーツ等の缶詰セット多数 インスタントカレー50個 インスタントの牛丼50個 チョコラメン2ケース 真空パックのご飯100個 各種お菓子(大好きなチョコレート等)缶ジュースのケース2個 缶ビールのケース2個 日本酒2?が5パック 各種焼酎5本 高級ブランド5本 高級ウイスキー5本 高級フランス産ワイン5本 おまけにウオッカ2本 テキーラ2本 煙草200カートン 使い捨てライター200個 小型マツチ箱2万個 各種スキンケアセット多数 高級化粧品セット10個 その他日用品多数
カセットコンロ2台。

カセットボンベ多数 塩と砂糖と胡椒が多数 ルイズの服と下着と靴が多数 各種筆記用具多数 高級万年筆10本 更にお気に入り漫画本や恋愛物文庫小説等?小型折りたたみ自転車一台 ノートパソコン二台 デジタルビデオカメラ一台 一眼レフデジタルカメラ一台 コンパクトデジタルカメラ一台 ポータブルブルーレイプレイヤー一台 ポータブルDVDプレイヤー一台 映画。アニメ。ドラマ等のブルーレイやDVDソフト多数(極秘ソフト有り) 特注高級機械式腕時計1個 ソーラ腕時計10個 (特殊な品物・ワルサーPPK一丁。九ミリ32ACP弾1400発 日本刀一本・

備前長船雪風)等の品物が多数……ルイズさん。どんだけ欲張りなんですか。

『今、私の悪口を言われた気がするわね』

アブナイ・アブナイ……

統べての準備が完了して後はハルゲギニアへの帰還の儀式を残すだけだった。

ルイズと博士は、最後に別れの挨拶をしていた。

『博士……十年もの長い間育てて頂き、更に此地球世界で生きて行く為の知識や常識等も教えてくださり、数々の思い出も下さり幸せでした。最後に博士の娘 敷島ルイズとして、本当に有り難うございます……。』

「ルイズ……親が娘を育てるのは当然の事なんだよ、僕の方こそ此十年君が側にいてくれてどんなに幸せだったか、だから僕こそ言いたい有り難うルイズ……」

『はか……いえ、お父さん……』

そう言って涙ぐみ。博士の胸に抱き着くルイズであった。

最後の別れも済まして。帰還の儀式を始めるルイズと博士。

『これから帰還の儀式を始めるから、用意して下さいルイズー。』

『はい！判りました博士。』

敷島博士に言われて用意していた。リヤカーを繋いだ特注のマウンテンバイクに跨がり杖として契約した。金の装飾を施した頑丈な造りの万年筆を取出していた。

「良いですか、ルイズ僕がカウント・スリーから始めるから、カウントゼロで増幅装置のスイッチを入れる時にルイズの持っている魔力を最大で上空に向けて放って欲しいー」

『はい！博士何時でも始めてくださいー。』

「…では。始めます…スリー・ツー・ワン・ゼロ・開始…」敷島博士のカウントゼロの声でルイズは。全精神力を込めて魔法を上空に向けて放つ。

増幅装置のスイッチを入れた敷島博士も。ルイズと同じタイミングで上空に向けて超能力の力を放っていた。

結界の内には・増幅装置によりルイズの魔法の力と敷島博士の超能力の力が増幅されて合わさった時。奇跡が起こりルイズの目前に光り輝く鏡の様なゲートが現れた・ゲートの向こうは。99.9%の確率?でハルゲギニア世界のヴァリエール公爵家に繋がっていた……答である。

「ゲートが何時閉じるかシレマセンからすぐにゲートを潜りなさい。」

「元気で暮らしてくださいルイズ……」

そう言った敷島博士は。サヨナラは言わず　ただ優しい瞳でルイズを見つめるだけだった。

『有り難う博士……さよならー………サイトオオオオオー……』

最後に才人の名前を叫んでリヤカーを繋いだマウンテンバイクに乗っていたルイズは。光り輝く鏡に吸い込まれる様に消えて行ったルイズ……』

続く。

004話ルイズの地球での10年その4（後書き）

漸く地球編が、終わりました。

次からは、ハルゲギニア編を書き上げていきます。

005話ウァリエール家に選って来たルイズその1（前書き）

今回からハルゲギニア編が、始まります！。

005話ウァリエール家に還つて来たルイズその1

〃〃〃此処はハルゲギニア：トリステイン王国・ヴァルエール公爵邸に在 池の辺

小鳥達が囀る声がする。

何時もと同じ朝が始まる筈であつたが、突然辺り一帯を眩しい光が覆い隠したと思つたところ。

バシユツと大きな音が鳴つたところから、忽然と光の中からハルゲギニアでは物凄く奇妙な形をした。

後ろに大量の物を積んだ荷車を繋いだ乗り物？が現れた。〃〃〃

乗り物？には、人が跨がっていた。

その女性らしき人を見てみると。

服装は薄い水色のシンプルなブラウスに淡いベージュの上着を羽織り、雪の様に真っ白な丈の短いスカートを履き白のニーソックスに赤のラインを施しピンクの紐が有る白い靴を履いている。

髪はウェーブがかつた流れる様なピンクブロンドな長い髪に、つぶらな鳶色の瞳スーと、整つた鼻筋、小さな薄紅色の唇と。

凄く綺麗な顔立ちに細い首筋、胸は標準より少しだけ小さめ。

長い手足に、少しクビレた腰、小振りなお尻と。

(上からT161B80W55H79) 極上の部類に属する。

歳は14か15才頃のフランス人形の様な、美少女だった。

『……此処は……。』（ルイズ心の声）

（十年ぶりだから、確信は出来ないけど……）。

確かに此場所には見覚えが在わね〜え〜と、あっちに見えるのが池よね〜）

（まだあるのかしら小さな頃まだ。

魔法が上手く出来なくて、母様達にしかられては、上から毛布を被り隠れていたあの小さなボートは……。）

（そうして隠れていると、必ずあの優しい笑顔をした男の人が捜しに来てくれたのよね〜）

ルイズが昔の色々な出来事を思っで感慨深げにしていた所：

池の辺りに突如強力な光が輝き、すぐに消えたのを訝しんだ。

一人のメイドが近付いて見てみると？そこには、荷物を積んだ怪しげな乗り物らしいのに跨がって、辺りを見回している？見知らぬ少女がいたのを気付いたメイドは大声で……。

「だ、だ誰かあああああああ……此処にいいいいーあ、怪しい者がいますー誰かー早くー来て下さいいいー。」

突如近くから大声がして、ビックリしたルイズは。

声が聞こえて来る方を見ると、一人のメイドがルイズを指差して、何やら酷く失礼な言を、大声で喚いているのを聞いたルイズは大きな声でそのメイドに向けて、大きく怒鳴っていた。

『チョットーそのメイドー何失礼な言を言っているのよーこの、私を誰だと思ってるのよー。』

綺麗な顔を赤くしながら、こちらに向かって怒鳴っている少女に。

メイドは気後れして、今にも泣き出しそうに為りながらも、弱々しい声でルイズに……。

「そそそうは、い、言われましても、あ、ああ貴女見たいな人？見たことも無ければ聞いた事も、あああありません……。」

『何ですってーこここここのメイドはーあああんた何て、話しにならないわねーあんた見たいなシタツパでは無い、此处で一番偉い人を呼びなさい。』

「さあ早く行きなさいよ!。」

そうしてルイズに、物凄い剣幕で怒鳴られたメイドは。

涙を流して、泣きながら、館の方へ走り去って行った。

『…全く、十年ぶりに漸く還って来たと思ったら！メイドの質も、下がったわね。』

その頃ヴァリエール家邸内では、今日も。

何時もと同じ様に、朝早くから使用人達が起き出し、邸内の清掃をする者と。

広大な庭を清掃する者がテキパキと仕事をしていた。

後はメイド達が邸内の各室を廻り、各種衣類等の洗濯物が入っているカゴを回収したり。

公爵夫妻を粗相がない様に静かに起こし、身支度を整えさせていた頃に。

何処から聞こえて来るのか分からないが、若い女性が大きな声を出して、助けを求めている。

その声が聞こえる範囲内に居た使用人及び家臣の警備隊員達が何事があったのかと。

すぐに声が聞こえて来る場所に向けて、大勢の者が駆け付けていった。

先頭に立って駆け付けている或若い警備隊員が、前方から凄い勢いでメイドが走って来るので、止めて事情を聞いてみる。

「おい、何が有ったんだ！」

「いいいい池の辺りに、ひひ光が、大きな光が輝いていたので、行って見ると、そそそこに、変な荷車と見知らぬ少女が居たんです。」

「それでお前は何もせずに、逃げてきたのか！」

そう言って怒鳴る、若い警備隊員にメイドは……。

「いえ、逃げてきた訳では無いんです。

その少女に何者かと聞きましたが、シタツパ何かに様は無い、此処で1番偉い人を呼んでこいと。

喚いていて、もうこれは無理だと思い誰かを呼びに行く途中でした……。」

「何だとー！此処で1番は公爵様ではないか！そんな誰とも分からない、怪しげな者を逢わせられる訳は無いー！」

そう言った、若い警備隊員はどうするか思索していると。

そこに追い付いた警備隊副隊長が若い警備隊員とメイドから事情を聞くとメイドには邸内に居る、執事長のジェロームに事情を知らせに行かせると。

若い警備隊員と更に追い付いて来た他の隊員達を連れて、怪しい少女が居る場所に向かって行く。

警備隊副隊長の指示で邸内の何処かに居る、ジェローム執事長を漸く捜し出したメイドは池の辺りでの出来事を包み隠さず、総て話した。

それを黙って最後まで聞いていた。

ジェローム執事長は今聞いていた話しに、何か気になる事が有りメイドにその部分を詳しく尋ねる。

「その少女は確かに歳は14か15で、容姿はピンクブロンドの髪を腰まで伸ばし、鳶色の瞳をした華奢な美少女だったと…。」

メイドに詳しく聞いたジェロームは、何かを確信した様な顔をして…。

「お前は今すぐにカリー又奥様の寝室に向かい、池での出来事ととくに少女の歳と容姿を詳しく話さない。」

そう言つてメイドを至急に、公爵夫人の寝室へ伺わせたジェロームは。

ヴァリエール公爵にこの重大事を知らせる為に足早に、公爵の寝室へ歩いて行くのであつた……。

その頃、池の辺ではルイズを確認した警備隊達は副隊長の指示の下、静かに杖を抜いて何時でもすぐに、魔法を放てる様に準備してゆくりとルイズに向かつて、

近付いて行くのだった。

メイド以外に、漸く話しが判りそうな者達が来たと思つていたが、近付く者達全員が杖を抜いて、隙が無く構えているのを見たルイズはビクツトして、少し慌てる様に近付く者達に、大きな声で呼び掛ける。

『チヨ、チヨツト待つて、ななな何よ、杖を向けて！わわ私は決して、ああ怪しい者じゃあ無いわよー？だだだから、杖を仕舞つてくれないかしら、ね、お願いだから。』

そう言つたルイズでしたが……。

この場所に一番先に駆け付け様としていた。

若い警備隊員がルイズに向けて大声で……。

『何を言っただやがるー！何処の世界に！自分で怪しく無い何てー
ー！寝言を言う奴が居るんだああ！馬鹿も休みやすみに言えええ
えよ！このペタンコのー！チンチクリンの！小便臭い小娘がー！』

そう言った若い警備隊員（実はマザコンの上に、大の熟女好きなのでルイズは全くの守備範囲外だから、容赦をしなかった）の罵倒にぶちギレそうになるのも。

何とかギリギリ迄我慢して、ルイズを罵倒していた若い警備隊員に向けて、ルイズは大きい声を出して言ったのでした……。

『ああ貴方、いい今、わわ私に向かって言った、ぶ無礼な事も、きよ、今日は機嫌がとても良いので、ゆ許して差し上げますわ〜。』

ルイズにそう言われた。

若い警備隊員はまた、ルイズに向けて……。

『何を言っただやがるー！何処の貴族のご令嬢見たいな！口ぶりだー！言っている！この、平民の小娘がー！いい加減にしやがれー！』

また、暴言を吐かれたルイズは今度こそ、我慢の限界を超えていた。

眼は血走り髪は波打ち、身体全体からほの暗い蒼い焰のオーラがゴウゴウと逆巻きながら、立ち上っていた。

その時……。

ルイズを罵倒していた若い警備隊員以外の、何かを思案中の副隊長を除く残りの警備隊員達は、たとえ平民の不審者とはいえ、どう見ても十代前半の少女に向けて大声で罵倒を浴びせる。

同僚に唾然としていた。

今まで何かを思案していた副警備隊長が、ルイズに罵倒を浴びせていた。

若い警備隊員に向けて大声で……。

「いい加減にしないかーアラン！何時も言っているだろう。」

汚い言葉や態度は改めると。

お前一人で済む問題では無いのだ。

我々警備隊員全体の、いや、この大恩が有るヴァリエール公爵家の品位が問われるのだ。

お前は公爵様に恥をかかせても、良いと思っているのかー！。」

警備隊副隊長に厳しく叱責された、
アランは言い訳を言おうとしていたが、警備隊副隊長の更なる叱責により、がっくと肩を落として警備隊員達の後ろに廻り大人しくしていた。

アランへの叱責が終った。

警備隊副隊長はルイズに向けて……。

その頃ルイズは。

(ルイズ心の声)

(……あっちの失礼な奴に、あの人が私の言いたい事を言って、叱ってくれたから何とか怒りが収まってきたから、後はあの人にフルネームを告げたら、信じてくれそうだし。)

ルイズが色んな事を思案していると、ルイズに警備隊副隊長が語りかけてきた。

「お嬢さん、先程は部下の隊員がとても失礼な、暴言を吐きまして申し訳有りません。」

部下に代わってこのポルトス・ド・レイノーが、心よりのお詫び申し上げます!。」

『いえ、もう私は気にはしていませんから。』

「そう言つて貰えるところだと仕手も有り難いことです。」

お嬢さん失礼ですが、お名前を教えてくださいませんか。」

『私の名前をですか、ミスターレイノーになら教えても宜しいですよ。私もこの名前をハルゲギニアで名乗るのは。』

十年ぶりですから緊張します。

では今から名乗らせて頂きます。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。』

そう言つてフルネームを名乗つてすぐに、警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーを含めた警備隊員に向かつて、それは見事に完璧な貴族達とする（ルイズは日本で暮らしていた、十年の間にルイズがハルゲギニアに還つた後に恥ずかしい思いをしない様に。

ヨーロッパの上流階級者が使う挨拶を含めた総てのマナーを、敷島博士が厳しく教え込ませていたのでした。）正式な挨拶をしたルイズであった。

ルイズが、それは見事な位、優雅にして華麗で鮮やかな、挨拶をしたのを見た、警備隊員達の中から、

「ほう、中々お目にかかれ無い程、見事な挨拶では無いかー。」

名の知れない、警備隊員からの称賛に、ルイズは。

『お褒めの言葉を賜り、ルイズ・フランソワーズ、嬉しく思います。

』

そう言って、警備隊員達に向けて、極上の微笑みをして見せた、ルイズでした。

それを見た、約一名を除く警備隊員達を魅了させたルイズ様（これが、後にハルゲギニア中に名を轟かせた、熱狂的なルイズ・フランソワーズ親衛隊と言う、ファンクラブが誕生した瞬間であったと、同時に才人の死亡フラグの確定でもあった？。）でした。

ルイズの微笑みにより、半分任務を放り出し掛ける。

警備隊員達（一名除く）を置いて、警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーはルイズの前まで来ると、ひざまずき、恭しく話し掛けた。

「……や、やはり……ルイズ・フランソワーズ様に、ございましたか

「いい、生きてよく、ご無事で何よりで、このレイノー嬉しく思います。」

先程ルイズ様を見たときには、まさかとは思いましたが、あまりにも、幼い頃の面影が有りました。

それで、お名を伺ったのでございます…。」

そう言って、レイノーは感極まり、涙ぐむ（むさ苦しいオッサンで有った）それを見たルイズは、顔が引き攣り少し後ろへ退いていた？。

『そんなに、小さい頃の顔立ちが残っているの！チョット複雑な気分よね〜ハア……。』

少し落胆するルイズだった。

（チョットだけ、シヨックなのよね〜顔立ちって、十年過ぎてても変わらないモノなのかしら〜私としては、立派なレディーに成長したと思っていたのよね〜。）

ルイズが自分の顔について、心中で色々考え事をしていら、レイノーが……。

「ルイズ様―漸く十年ぶりに、ヴァリエール家に還って来られ、お疲れとは存じますが、今暫くのお待ちを申し上げます。」

先程、使いの者を送りましたので、すぐにジエローム殿が駆け付けて参りましょう。」

『え、ジエロームだけなの！母様や父様それに、姉様達は来ないの……。』

そう言っつて、淋しそうなルイズですが。

「いえ、ジエローム殿ならすぐに気付き、公爵様とカリーヌ奥様に連絡されましょう。」

そうなれば、すぐに来られましょう。」

その頃、ヴァリエール邸内の在場所では……。

此処は地獄の閻魔様より、恐ろしい 烈風カリン ことヴァリエール公爵夫人、カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールの寝室で在。

「何か物凄く失礼な言を、言われた気がします。」

此処は一つエアカッターをお見舞いして上げましょうか。」

そう言っつて、満面の笑みをして何処かを見つめ、杖を向けよ様とされています、それだけは、御勘弁を……もう二度と申しませんので、

平に平にご容赦を……。

「さてと、冗談は此処迄にして。」

怖い冗談ですねカリン様……。

「何か胸騒ぎがして、今日は何時よりも早く起きましたが、私に取って重要な事が起こる気がします。」

私の勘は外れませんから。」

独り言を言うカリーヌの寝室にノックの音が響き渡る。

「…入りなさい。」

入室を許された、メイドが慌てる様にして入って来たのを見た。

カリーヌは眉をヒソメきつい口調でメイドに……。

「何ですか！朝早くから、騒々しい！常日頃から言っていますね。ヴァリエール家のメイドとして、誇りを持って沈着冷静に行動しなさいと！。」

カリーヌに叱責されたメイドは。

目まぐるしい程の出来事の連続で、限界を超え掛けていた処に、カリーヌの叱責がトドメと為り憐れなメイドは、カリーヌの目前で涙を流して泣き出しの有る。
これには流石のカリーヌでも……。

「……もう、泣くのは止めなさい、一体何が有ったのです、まずは涙を拭いて落ち着いて、ゆっくり話しなさい。」

そう言つてカリーヌは、メイドを落ち着かせてから、話を聞いていたのです。

「……………と言つ訳なのです、
奥様。」

メイドは、池の辺に現れた怪しい少女の事から、その少女に関連した話しが有るので執事長のジェロームが、カリーヌに池の辺迄来て下さいと言つて言でした。

話しの中の少女の歳頃と、身体の特徴を聞いてカリーヌは確信したと同時に、素早く行動して窓を開け放ち、そこからフライの呪文を唱え。

。物凄い速さで池の辺目指して、すっ飛んで行った（母の愛は凄…）

カリーヌがメイドに話を聞いていた頃

ヴァリエール公爵の寝室では。

此処はヴァリエール公爵の寝室前の廊下に、執事長のジェロームがいて、今からノックをして入室しようとしていた。

「公爵様、ジェロームでございます。」

「入れ。」

ヴァリエール公爵に入室を許されて、寝室に入るジェロームだった。

寝室に入ると既に公爵は身仕度を整え。

椅子に座り優雅に紅茶を嗜んで、朝の一時を過ごしていた。

「お早うございます公爵様。」

「うむ、ジェローム今朝は少し来るのが早いな、何か有ったのか。」

以外にも鋭い公爵でした。

「先程、庭園の池の辺に怪しい者が居ると、或メイドが言いに来ましたので、その事を、公爵様にご報告申し上げに、罷り越した次第でございます。」

「その怪しい者を、確認させに誰かを行かせたのか。」

ジェロームに事の仔細を聞いている公爵でした。

「はい、公爵様、警備隊副隊長の、ポルトス・ド・レイノー殿と配下の方達が、確認しに行っております。」

「そうか、レイノー達が向かったのなら安心して、任せる事が出来るな。」

すぐに終らせて、報告に来るだろう、心配する事は無い。」

そう言った公爵は、たいした事は無いだろうと思っていた。

ジェロームの次の言葉を聞く迄は……。

「その事なのですが自分で確認した訳では、無いのですが初めに見た、メイドが言うには怪しい者は少女で、歳は14か、15、髪は腰迄で有るピンクブロンドの華奢な身体の、美少女だと言っておりますので、もしかしたらと思ひ独断で、カリーヌ様に先程のメイド

を知らせに、いかせました。」

ジェロームのその言葉を聞いていた、公爵は少しずつ顔色が変わって最後は、
驚愕した顔つきに成っていた。

「……ジェ、ジェローム、そ、それはまさか！ルルルイズの事なのか。

信じられん。」

「公爵様、レイノー殿からは、まだ報告が来ておりませんので、確かだとは？申せません。」

ジェロームに、そう言われた公爵は…。

「ならば、わたし自身で確かめに行くまでだ！」

公爵は、ジェロームにそう告げると、窓を開けてフライの呪文を唱え飛び立ち、池の辺へ向かって行くので有った。

（似た者夫婦であった）

池の辺で両親を待ち侘びる、ルイズ…。

(ルイズ心の声)

(ああ、早く母様と父様に逢いたい。

残念な事に、レイノールの話しだと姉様達は此処では無く、別の所に住んで居ると言う……。)

色々な考え事をしていたルイズでしたが、突如その上からゴウオ―と、轟音が鳴り響いたと思ったら、物凄い衝撃とともに、ルイズの直前に降り立った者は。

ルイズが夢に見るほど逢いたいと願った、愛おしい母様が……。

(母様が、有れ程逢いたかった母様が、手を伸ばせば届く所に居た……。)

全力でフライを使い、池の辺の上空迄来たカリーヌが下を見ると、そこに居たのは、捜して捜して捜し尽くして、トリスティン、更にハルゲギニア全域や、

ツテを使い東方のロバ・アル・カリイエ、果てはエルフの住むサハラ
の砂漠迄捜したが見つからなかった、ルイズがそこに居た。

カリーヌは迷う事無く、直前に降り立ち真っ直ぐにルイズを見つめて……。

「あ、貴女は、ル、ルイズ…ルイズ…なのですか…私の小さな…小さなルイズなのですか……。」

そう言って、涙が堪えきれなくなって、言葉が詰まったカーリーヌでしたが、その時ルイズが…。

『か、母様、あ、貴女の、小さな、私が貴女の小さなルイズです母様！。』

そう言って、目の前に居るカーリーヌに涙を流し、泣きながら飛び付く様に抱き着いていたルイズ…。

「私の愛しい…小さなルイズ…ルイズ！…。」

涙目をしながらそう言った、カーリーヌはルイズの身体を包み込む様に、きつく抱きしめていた。

今までの空白の時を取り戻す様に、何時までも抱きしめていたかった、カーリーヌでしたが……。

ルイズとカーリーヌが母と子の感動の再会をしていた所に、少し遅れてヴァリエール公爵が到着した。

「ルイズ！ルイズなのか、君は！ワタシの小さなルイズなのか！」

そう言う、公爵にルイズは…。

『そうです、私が貴方の小さなルイズですわ、父様』

父に笑顔でそう言ったルイズであった。

「ルイズ、ワタシのルイズ、もっと近くに来て父にお前の可愛い顔を見せて欲しいのだー！」

公爵はルイズに、自分の胸に飛び込んで来て欲しかったのだが。

『あの、私も父様の顔をよく見たいのだけど、母様が抱きしめたまま離してくれないの。』

「ず、狡いでは無いか！一人占めはワタシにも。」

そう、妻のカーリーヌに抗議した公爵でしたが……。

「…だめです！例え貴方でも、いえ、誰で有れルイズを私から、引き離せる者などおりません！二度と離すものですか！今離せば又この子が消えて仕舞いそうで、離せません。」

ルイズを強く抱きしめたまま、そう言ったカリーヌに公爵は何も言えなかったのです…。

『あの母様、私は何処にも行きません。消えもしません。』

だから父様にも、無事に還って来た私を見て貰いたいの〜ね、お願い。』

ルイズが懸命に、カリーヌに頼んでいるのを見た公爵は感激して涙ぐむのです…。

(ルイズ心の声)

(私の事をとても深く思っていてくれた。

母様には凄い嬉しいのだけど、更に力を込めて抱きしめるのは、止めてーか身体がぁぁあー。)

実はこの時ルイズはかなり危なかったのですが…。

「ルイズの頼みなら仕方が有りません。貴方、特別に許可します。近くでルイズを見ても宜しい。」

カリーヌの許しを貰って、喜ぶへタレな公爵で有りました。

それを見ていたルイズは、小さな声で……。

『ハア、相変わらず父様は母様に尻に敷かれているのね。でも是が家に還ってきた実感がするのよね。』

ハルゲギニアに還って来て、初めてホットしたルイズでした……。

続く。

005話 ウェリアール家に選って来たルイズその1 (後書き)

書き上げるペースが落ちてきた。

006話ウァリエール家に選って来たルイズその2（前書き）

今回は最後の方に

エレオノールが

少しだけ登場します。

006話 ウェリアー家に戻って来たルイズその2

〃〃用事を片付けて池の辺に来た。

ジェロームが見たのは、シンプルな服装をしたピンクブロンドの十代前半の美少女をカーリーヌが抱きしめていたのと、公爵は空に向けて始祖ブリミルに感謝の言葉を述べていた。

更に警備隊副隊長のポルトス・ド・レイノーは、感極まり涙ぐむし、周りの警備隊員達は(一名除く)何故か落ち着きが無いのと、思わず空を見上げ溜め息をつくジェロームで有ったが、何時までもする訳にもいかないので、カーリーヌの所に向かい挨拶をしたのでした。

「おはようございます、カーリーヌ様。」

「おはよう、ジェローム。」

挨拶をするカーリーヌでした。

「カーリーヌ様、お隣におられる方は、ルイズ・フランソワーズお嬢様なのですか。」

確信が持てず、失礼だとは思いつつも、尋ねずには要られなかった、ジェロームであった。

「久しいわ、ジェローム……」。

十年ぶりに成るのかしら、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

本日無事にヴァリエール家に還って来ました、是からは宜しくね。』

そう言つてルイズはカーリヌに代わつて答え、更に顔を少し下げスカートを摘み上げて華麗な挨拶をして見せた。

ルイズの完璧な挨拶を受けたジェロームは感銘して……。

「立派な挨拶でございました。」

「ご無事に戻られ、このジェローム嬉しく思います。」

是からは使用人一堂、ルイズ・フランソワーズお嬢様に誠心誠意仕えさせていただきます。」

ジェロームの言葉にカーリー又は…。

「ジェロームのその言葉嬉しく思います。」

「それから、アカデミーに居るエレオノールとフォンテーヌ邸の
カトレアに、至急に梟便を送り出しなさい、今日の晚餐は何時もよ
り少し豪華にするように厨房に命じる様に。」

「はい承りました、それからカーリー又様、朝食は何時もの様にテラ
スでお召し上がりになりますか。」

「何時もの様にテラスで用意しなさい。
勿論ルイズの分もです。」

判りましたと言って恭しく頭を下げ、その場を辞したジェロームで
した。

是からの事をどうして行こうか、思案していたカーリー又は先ずは…。

「

「貴方！何時まで始祖に感謝しているのですか！そんな事よりも、
ルイズの是からの事を考えてください！…全く…。」

カーリン様には、始祖へ感謝を捧げるより、ルイズの将来を考える方

が凄い大事な事でした。

「済まんカリヌ、テラスで朝食を食べながら、ルイズの是からの事を考えていこう。」

そう言って、邸内に行こうとしていた公爵でしたが…。

「少し待ちなさい貴方、ルイズこの奇妙な乗り物と荷車は何なのですか。」

カリヌの指摘に説明するルイズ

『この品々は異世界地球から持って来た、私の荷物や母様、父様や姉様達へのお土産の品々ですわ。』

ルイズの説明を受けても余り判らないカカリヌでした。

『テラスで朝食を食べながら話し合っていた、公爵夫妻とルイズ』

「ルイズ、十年前に何があったのか、話して貰え無いか。」

そう、ルイズに聞く公爵。

「ええ、お話ししますわ…。」

十年前偶然に、呪文を唱え成功した。

サモンサーヴァントの鏡に躓いて吸い込まれた先が、異世界地球だったと恥ずかしそうに語ったルイズでした。

それを聞いた公爵夫妻は、少し呆れていたが…。

「ルイズ、その異世界とは何なのか、それにこの十年間のお前がどうしていたのかも、教えてくれないか。」

「今から良います。」

私がこの十年どう暮らして来たのか。」

鏡に吸い込まれて気付いたら、異世界地球の日本と言う国に居たと。

初めて出会った人が敷島礼次郎博士で、敷島博士はルイズを養女に

して育ててくれて学校に通わてくれた。

更に敷島博士が持っている知識に常識や各種マナーなど、総てを教えて貰った事等。

最後に敷島博士の助言でルイズの魔法の系統が、伝説の虚無であった事が判り、十年間魔力を磨きその力を使って、漸く十年ぶりにハルケギニアに還って来れた事を。

「ル、ルイズお前えは、その地球と言う異世界に居たと……。」

ルイズの語った驚愕の事実には公爵夫妻は驚いていた。

「異世界に居たのでは、ハルケギニア中を隈なく捜しても見つからない筈ですね、貴方。」

「うむ。」

納得する公爵夫妻でした。

更にルイズの系統が伝説の虚無でコモンマジックなら使える事が分かること、喜ぶと同時に虚無の力を政治に利用されない様に、家族だ

けの秘密にすることを決めた公爵夫妻でした。

「是からのルイズの事は、どうしたら良いと思うカーリヌ…。」

ルイズの将来を妻のカーリヌに相談する公爵ですが。

「まずはルイズに聞いて見たいのですが、

ルイズはどうしたいのです。」

カーリヌに聞かれたルイズは。

『母様、父様、私！学校に行きたいのです。

どうしても…。』

「学校と言うのは魔法学院の事かい。」

『はい！魔法学院の事です父様。』

元気に返事をするルイズでしたが…。

難しい顔をして、暫く黙ったままの公爵だった。

「貴方、今年の入学式はもう一月も有りませんが、今から申し込んで間に合うのですか。」

「無理だろう今からでは。」

断られるのは間違いない筈だ。」

そう答えるしかない公爵でしたが。

諦めないルイズは更に何回も頼むのでした。

「ルイズ、何でそこまで学院に行きたいのかね。」

父にそう尋ねられたルイズは…。

(ルイズ心の声)

(それはアレの事があるから、此処に居たらまずいのよー超危険日だったから、八割いえ、九割の確率で宿している筈？だから、此処に居たらバレタ場合、世間に秘密が漏れない内に水の秘薬で流せられるはず、学院では人目があるからそれは出来ない筈よ。

何としても学院に入るのよー私は!。))

本当の事は言え無いルイズは、両親にはごまかす事にした。

『母様、父様、私ハルケギニアに今日還ってきたばかりだから、他の貴族の子女達に比べたら教養等が遅れていると思うの。』

それに魔法の練習もしたいし、今までは人前で出来なくて、隠れてしていたのゝだから早く他の者達に追い付きたいので、それが今年に学院へ行く理由です。』

話しの中に聞き捨てならない事があつたカリー又は…。

「まさか、ルイズが居た異世界には魔法が無かったのですか!。」

『はい、そうですわ母様。』

それどころか王様は居ても貴族は居ませんでした。』

ルイズの言葉に公爵夫妻は驚き言葉も無かったが…。

「それでは、魔法や貴族が無いのではどうやって、生活や政治をしていたのだ！」

『それは、政治は平民の中からみんなが選んだ者がして、生活は科学を使っていました。』

お土産にも科学を使った物があるから、後で見せるわ。』

フーと溜め息をつく公爵だった。

「そんな貴族も魔法も無い異世界に十年も居たルイズが、焦って早く学院に行きたくなるのも判る話だな、此処はワタシが何とかしよう十年ぶりに逢えた可愛いルイズの為だ！」

そう言っつて、任しておけと言ったような顔をしている公爵？。

「貴方、本当に大丈夫何ですか、ルイズの将来が決まるのですよ！」

「何、通常の寄付金の二倍いや、三倍も積みめば良いだろう、それで駄目ならワタシが学院に乗り込み、オールドオスマンに直談判すれば決まるだろう。」

父のその言葉を聞いてルイズは喜んだ声で、

『父様大好き!。』

と言って公爵に抱き着いたのでした。

そうして久しぶりの楽しい朝食の一時が過ぎて

ルイズ

に取っては十年ぶりのヴァリエール家での晚餐が始まるのでした…。

此処は、トリステイン王国の首都トリスタニアに在。

魔法アカデミーその一室でアカデミーの一研究員である、この腰の先迄ある見事なストレートなブロンドの髪に、キツメな眼がねの奥は知的なチョット釣りぎみの瞳、スーとした鼻筋に気の強さを現す唇と端整な顔立ちをして、細い首筋から肩、クビれた腰、細長い両手両足とスレンダーな身体。

上からT172B72W56H78とモデル並の見事なプロポーシヨンである（大草原を除けば）。

「ムムムム……。」

「何してるのよ、天井に向けて唸る何て。」

「…何処かで凄く失礼な言われた気がして…。」

「そんな事よりもエレオノール、実家からの手紙には何て書いて有ったの〜それ特急便でしょう。」

「それがすぐに、帰って来なさいって。」

竜籠を手配したからそれに乗って来なさいと、重大事だからアカデミーも二週間の休暇を取りなさいだって。」

「何よそれって。」

「だから、すぐに支度して帰らないとね。」

時間が無いからオードリーからゴンドラン議長に、休暇願い言っ
てね〜。」

「あたしがー自分で良いなさいよ!?!。」

「そんなこと言わずにお願い、お土産持って来るから〜。」

「…しょうがないわね。」

「お土産絶対だからね!。」

オードリーが物凄くビックリする程のお土産であった。

「ハイハイ、じゃあもう行くわね。」

後は宜しくね。」

そう言って足早にアカデミーを出て行くエレオノールでした。

今から帰るヴァリエール家で衝撃の再会が、待っている事をまだ知らないエレオノールだった。

続く。

006話ウァリエール家に選って来たルイズその2（後書き）

次回はカトレアの登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897y/>

ルイズ：ハルゲギニアに還る

2011年11月27日06時41分発行